



いつか、あの作品の舞台へ行ってみたい——。  
小説、映画、絵画、音楽……名作にはそんな、人を引きつける  
力があります。ずっと心に残る、名作の舞台を紹介します。

アーティゾン美術館/2020年に開館。前身はプリチストン美術館。「STEPS AHEAD (ステップス アヘッド) 新収蔵作品展示」(~5月9日)で《海の幸》を展示中。  
●入館はウェブでの日時指定予約制。10時~17時30分、上記展示は月曜休(5月3日は開館)。ウェブ予約チケット1200円、当日チケット(窓口販売)1500円。東京駅八重洲(やえす)中央口から徒歩約5分。問い合わせは、ハローダイヤル☎050・5541・8600

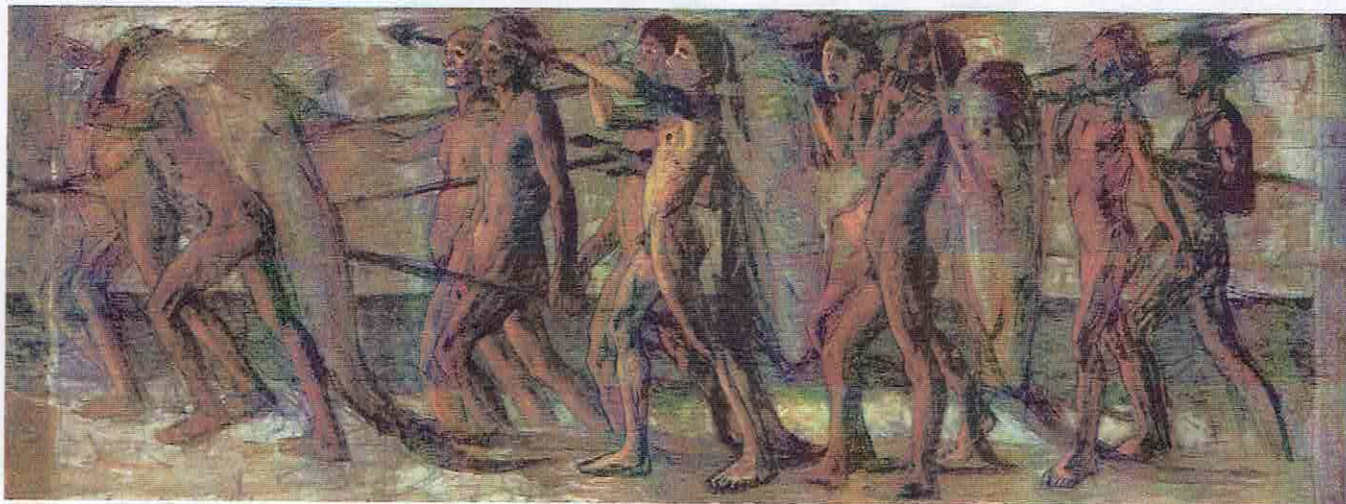
第11回  
(最終回)  
絵画

## 《海の幸》

千葉県館山市

青木繁《海の幸》

1904年 油彩・カンヴァス 70.2×182.0センチ  
重要文化財 石橋財団アーティゾン美術館蔵



漁師たちが獲物を背負い意気揚々と行進していく——荒々しくも生のエネルギーに溢れた絵画が、青木繁の《海の幸》です。

1882(明治15)年、今の福岡県久留米市に生まれた青木は、高等小学校で坂本繁二郎に出会います。青木は坂本が通う画塾に入り、絵画の道へ。二人は生涯、画家として切磋琢磨することになります。

17歳で上京した翌年、青木は東京美術学校(現東京藝術大学)に入学。在学中『古事記』などの神話や文学など書物を読みふけった経験は、白馬会第8回展での《黄泉比良坂》など十数点の受賞、さらにのちの『日本武尊』など、神話をモチーフにした一連の作品に大きな影響を与えます。

1904年に学校を卒業した青木は、坂本、森田恒友、恋人・福田たねと房州の布良で夏を過ごします。天富命が忌部一族を率いて上陸したという開拓神話が伝わる地で、太陽と海、恋人の愛を受けた青木は、次々と作品を制作。そして生涯の最高傑作といわれる《海の幸》——。坂本が見た漁の様子や布良崎神社の神輿から着想を得たという作品は、古代神話を



青木たちが滞在した布良の集落。写真左に青木が「僕等の海水浴場」と呼んだ「阿由戸(あゆど)の浜」があります。●内房線館山駅から安房(あわ)白浜行きジェイアールバス東約22分の安房自然村下車。青木繁「海の幸」記念館・小谷家住宅は徒歩約3分(現在休館中)

写真提供/NPO法人安房文化遺産フォーラム

彷彿させる勇壮さで見る者を圧倒し、大変な評判を巻き起こします。今も布良には、青木たちが滞在した小谷家住宅が「青木繁『海の幸』記念館」として残されています。その後、青木は貧困や作品の評価に苦しみ、病を患ってわずか28歳で生涯を閉じます。しかし、近代日本絵画の代表作ともなった《海の幸》を目の当たりにすれば、確かにあの輝かしい夏はあったのだ、と思えてなりません。

●観光の問い合わせ/館山市観光協会☎0470・22・2000